

古今六帖と千載佳句

清田, 伸一

<https://doi.org/10.15017/12254>

出版情報 : 語文研究. 21, pp.1-11, 1966-02-28. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

古今六帖と千載佳句

清田 伸 一

はじめに

古今六帖と白氏六帖との影響関係については源順の和名抄の媒介として平井卓郎氏が詳述しておられるが、「恋・雑思」については源順集との関係を述べ、古今六帖の「人」部と白氏六帖の第六卷、第七卷、更に和名抄の人倫部とを比較しておられるにすぎない。

白氏六帖のその目録には

第六卷 宗親奴婢 第七卷 人状貌貴賤隱逸雜筆

(宋本白氏六帖事類集による)

とあるにすぎず、その細目を検討してみても古今六帖の「恋・雑思」の細目にあてはまるといふものではなく、その相違は大きいといわねばならないであろう。ただ単に和歌集と辞書との相違、古今六帖と白氏六帖との相違という言葉で結論されないのであるように思われる。白氏六帖中に古今六帖の細い部類の片鱗を見出し得ないことはないのであるが、それはあまりにも人的なものであつて、歌に於ける恋とか思という感情とはかけ離れたものである。たしかに白氏六帖に於ける辞書的性格と古

今六帖のように和歌を類聚したものととのその内容に於ける相違には大きなものがある。内容に於ける相違は別として部立について、恋と思とを除いた他の部に於ては著しい類似を示していることは注目せねばならぬものであるが、古今六帖の編者は恋と思とを区別することによって六帖そのもの、特色を打出しているのである。契沖が新校古今和歌六帖叙の中で「蓋其為名取諸白氏六帖乎」といつているように白氏六帖を慕つて名付けられたのかもしれないが、白氏六帖を踏襲したものではないといふ点が存するのである。

平安朝初期の漢文学全盛の頃宮廷の公的な文藻として通用していた漢詩のその集に於けるところの分類意識は次第に細分化されつゝあつた。懷風藻から凌雲集の頃には作者別に分けられたものが、文華秀麗集、句題和歌、日観集へ進んでくると、その序には「分部同類。方為日観集」とあるようになってくる。日観集と同じく大江維時の撰になるところの千載佳句は表面的にそれ程でもないが、細部を見てみるとそれは日本の要素を含んだものであり、後述する如く、古今和歌六帖もこ

ういう類聚書の上に立つてその部類意識は働いていたものと思われるのである。漢籍からの直接の影響を受けた和歌書の存在を肯定する以前の問題として「漢籍——日本に於ける漢詩文——和歌」へと段階的な歩みを肯定することの方が先決問題となってくるのである。

千載佳句は金子彦二郎氏は延長三年の撰とされ、川口久雄氏は天暦年間とされているが、古今集撰進後、後撰集の時代迄の成立である。この千載佳句を矢面に古今六帖の部立意識をみて

行くことにする。

千載佳句と古今六帖の細部にわたる類似を列挙することにする。古今六帖の「春、夏、秋、冬」は千載佳句の「四時部、時節部」に相当するものであるが、ほとんど完全な一致をみるといって、であろう。

古今六帖		千載佳句	
大部	細部	大部	細部
春			
春の はて ⑪	三 月 ⑩	春 立 日 ①	四時部 立春①
	や よ ひ ⑨	な か の 春 ⑧	四時部 早春②
		あ を む ま ⑦	時節部 元日①
		わ か な ⑥	天象部 春雪⑩
		ね の 日 ⑤	時節部 寒食②
		の こ り の 雪 ④	四時部 春興③
		つ い た ち の 日 ③	時節部 三月
		む ②	時節部 三日③
		春 ①	四時部 暮春⑥

初		夏	
夏 の は て ⑪	更 衣 ②	卯 月 ③	四時部 首夏⑧
	う の 花 ④	卯 ③	四時部 避暑⑫
	神 ま つ り ⑤	卯 ③	四時部 避暑⑫
		五 月 ⑥	四時部 避暑⑫
		五 日 ⑦	四時部 避暑⑫
		あ や め 集 ⑧	四時部 避暑⑫
		水 無 月 ⑨	四時部 避暑⑫
		な こ し の 被 ⑩	四時部 避暑⑫
		夏 の は て ⑪	四時部 避暑⑫

秋		立	
秋 の は て ⑪	初 秋 ②	七 夕 ③	四時部 立秋⑯
	朝 ④	七 夕 ④	四時部 立秋⑯
	葉 ⑤	七 夕 ④	四時部 立秋⑯
	十 五 夜 ⑥	七 夕 ④	四時部 立秋⑯
	駒 ひ き ⑦	七 夕 ④	四時部 立秋⑯
	な か ⑧	七 夕 ④	四時部 立秋⑯
	九 日 ⑨	七 夕 ④	四時部 立秋⑯
	秋 の は て ⑩	七 夕 ④	四時部 立秋⑯

初		冬	
初 冬 ①	神 無 月 ②	し も 月 ③	四時部 冬興⑭
	か く ら ④	し も 月 ③	四時部 冬興⑭
	し は す ⑤	し も 月 ③	四時部 冬興⑭
	仏 名 ⑥	し も 月 ③	四時部 冬興⑭
	う る 月 ⑦	し も 月 ③	四時部 冬興⑭
	と し の 暮 ⑧	し も 月 ③	四時部 冬興⑭
		し も 月 ③	四時部 冬興⑭
		し も 月 ③	四時部 冬興⑭

(注八)

「夏」部の「更衣②、卯月③、うの花④、神まつり⑤、あやめ草⑧、水無月⑨、なごしの朧⑩」、「冬」部の「神無月②、かくら④」に相当するものは見当たらないが、純日本的、和歌的なものである以上やむを得ないものと看做し得るのである。それらを除いても全体の七十五パーセント以上の類似を示していることは驚くべきことである。

「天」部は「天象部」に適合する。「天の原①、照日②」は「晴霽⑧」に、「春の月③」以下「有明⑩」までは「月①、風月②、感月③」に、「夕やみ⑪、ほし⑫」は「夜⑭、閑夜⑮」に、「春の風⑬」以下「雉の風⑰」は「風月②、風雨⑤」に、「雨⑲、村雨⑳、時雨㉑」は「雨④、風雨⑤」に、「ゆふたち⑳」は「暮雨⑥」に適合する。更に「雪⑳」は「雪⑨」に、「あられ㉑、こほり㉒」は「雪夜⑩、氷⑳」に適合するものである。

こ、で古今六帖の「雲⑳、露㉑、しづく㉒、かすみ㉓、きり㉔、霜㉕」、「煙㉖、ちり㉗、なる神㉘、いなつま㉙、かけろふ㉚」はそれぞれ一群をなして千載佳句に相当するものを見出し得ないものである。しかし千載佳句の内部を詳しく調べてみるに、「雲、露、霜、煙、塵」の語は相当数の詩中に見ることが出来る。しかるに、これによって「雲」以下の細部が千載佳句と合致しないのであるが、類推され得るものであるということとはできるのである。

古今六帖「山」部は千載佳句の「地理部」に匹敵する。「やま①」以下「山ひこ⑫」までは「山水①、山中②、泉③、曝布水④、春水⑤」に相当するものである。「天」部同様にして千

載佳句の詩中を見るに、「山どり、さる、鹿、いはほ、峯、たに」は見出せるものであることは、類推を許される言葉であるということが出来る。しかし、「そま⑯」以下「むまや㉑」まではその一つも関連性をもたないのは注意を要すること、云わねばならないだろう。「天」部に於て一群をなして関連しなかつたこと、一緒に後述することにする。

次に「田、野」は千載佳句の「遊放部」にその細目は見出せる。しかも「田」部に「春の田①、夏の田②、秋の田③、冬の田④」があり、「野」部に「春の野①、夏の野②、秋の野③、冬の野④」があること、「遊放部」に「春遊③、夏遊④、秋遊⑤、冬遊⑥」があることはその類似性を一層強めているのである。その上「田」部最後の「かりほ⑤、いなおふせ鳥⑥、そほつ⑦」や「野」部の「かり⑥」以下最後迄は相当するものがないことは前部同様後述することにする。「かり」以下は千載佳句の「遊獵」に相当しないことでもないのであるが。

「都」部は「宮省部」の「禁中①」に相当するものである。「田舎」部は「居処部」に相当する。「古郷④」は「旧宅③」に「やど⑤、やどり⑥」は「亭④」に、「かきほ⑦」は「隣境⑯」にあてはまる。

「家」部も同じく「居処部」に相当する。「いゑ①」は「居宅①」に、「となり②」は「隣家②」、「井③」は「水亭⑥、水楼⑧、水閣⑨」に、「まがき④」は「隣境⑯」に相当する。が、「庭⑤」以下該当するものが見当たらないが、之も後述することにする。

「人」部に於ては千載佳句の「人事部」が相当する。「おき

な①」は「老③、老人④」に、「をんな②」は「美女⑤」に、「おや③、うなひ④、わかいこ⑤」は「兄弟⑥、外孫⑦」にあてはまる。しかし、「くるま⑥、うし⑦、うま⑧」は相当するものが見当らない。「人」部は歌数合計四十二首しか存しないのであるが、どの類聚書にも見られなかった部を一部として區別することによって、とうよりもむしろ恋・思を他の部に區別することによって和歌類聚書としての古今六帖を位置づけているものと考えられる。

「仏事」部は「釈氏部」にあてはまる。「寺①、鐘②」は「寺①、禪居②、僧房③」に、「ほうし③、あま④」は「禪僧④」に相当する。

古今六帖第三帖は「水」部である。千載佳句の「地理部、居処部、遊放部」との類似が認められる。「水①、水とり②」は「地理部」の「山水①」に。「をし③」以下「かはつ⑬」迄の合計十四項目は合致するものがない。「はし⑭」は「居処部」の「橋⑬」に、「ひ⑯、るせき⑰」は同様「渠⑱」に、「しがらみ⑲、夜川⑲、網代⑲、やな⑲」は「遊放部」の「漁⑲」に相当する。「え⑲、いけ⑲、ぬま⑲、うき⑲」は「居処部」の「池⑲、秋池⑲」に、「たき⑲」は「地理部」の「曝布水④」にあてはまる。「にはたつみ⑲」以下「しほがま⑳」まで合計十項目は群をなして該当しない。「ふね㉑」は「居処部」の「泛舟⑬」に、「つり⑳、いかり㉑、あみ㉒」は「遊放部」の「漁⑲」に相当する。「なのりそ㉓」以下最後迄合計十八項目はあてはまらないのは注意すべきである。ともに群をなしてあてはまらないものは後述することにする。古今六帖に於ける「水」

部は地理的なものから漁としての性質を有するもの、更には水鳥、水草類をも含んでかなり連想性に豊んだ部だといえる。水に関する全てを網羅しようと試みたのではなからうか。

白氏六帖との関係は巻第二、第三が指摘されているが、白氏六帖の連想性と古今六帖の連想性とは相当の開きがあつてしっくりゆかぬ。その点古今六帖の編者は水に関係ある事項を羅列することによって古今六帖そのもの、目的を明にしようとしたのであり、古今六帖の作歌参考書としての性格も領けるところである。

第四帖の「恋」部は千載佳句の中にはその一つも相当するものが見当らない。このことは注目すべきことであつて、「雑思」の部で詳述することにする。

「祝」部は千載佳句の「人事部」に於ける「慶賀⑰、感恩⑱、謝恩⑱」に相当する。こゝに於ける「わかな②、つま③、かざし④」も純粹に和語である。

次に、「別」部は「別離部」にあてはまるものである。「わかれ①」は「別意①」に、「ぬき②、たむけ③」は「饒別④」に、「たび④」は「行旅⑩」に、「かなしひ⑤」は「旅情⑬」に該当する。この「別」部の中に「長歌⑥、小長歌⑦、古き長歌⑧、旋頭歌⑨」が入っているが、これは「別」とは必ずしも関係あるものではなく、便宜上もつてきたとする説は妥当と思われる。

「雑思」は「人事部」に相当する。久曾神昇氏が論じておられるように「思」は「恋」の前段階的なものであるにしろ、そうでないにしろ、恋情をもつたものとしての性質には違いはないのである。古今六帖が恋と思とを區別したことについて山本

明清の標注は「第五帖にまた雑思ありこは第四帖のさふのおもひのうたをひらきてくはしくのふるに似たり歌は恋をもと、すされは万葉にも春雑歌秋雑歌など有て相聞の外はみな雑歌とす相聞はすなはち恋なり古今より已下すへて恋の歌五卷六卷ありされは此ふみも恋のうた第四第五にわたらせたるにや」と云っている。この点に関しては平井氏は前掲論文の中で「恋歌と思歌との内容的相違には問題が存すると思ふが、とにかく歌題として区別されたことは事実である。斯様な区別は実際問題として頗る微妙であり、従つて自然に「恋」にも統一されて行つたのであろうが、六帖にみられる『雑思』の分類はかゝる過渡期の変遷推移の实情を物語っているものと思はれる。」と述べて、その源順集との關係を強調しておられるが、このことも源順集そのみに頼る以前の問題として「雑思」の細部を見わたしてみることがあるのではなからうか。というのは先にもみたように古今六帖と白氏六帖との比較に於てみられなかつたものが、何らかの誘引によつて古今六帖の細目の中に入つていると思われるからである。「別」までみてきた千載佳句との比較に於てそれは明になつてくることである。

古今六帖		千載佳句		大部	
大部	細部	大部	細部	大部	細部
雑思	しらぬ人① いひはしむ② としへていふ③ はじめてあへる④ あし⑤ あし⑥ あひ思ふ⑦ あひ思はぬ⑧ こと人を思ふ⑨ わきて思ふ⑩ いして思ふ⑪ 人にしらるゝ⑬ よるひとりをり⑭ ひとりをり⑮ ふたりをり⑯ あかつきにをく⑰ 一夜へたてたる⑱ 二夜へたてたる⑲ 物へたてたる⑳ ひこえたてたる㉑ 遠道へたてたる㉒ うちきてあへる㉓ よひのま㉔ ものかたりの㉕ 人事部 近くてあはず㉖ 人をまつ㉗ 人をまたす㉘	人事部 遇友②⑦ 天象部 暁⑬ 人事部 憶兄弟②⑦ 人事部 憶友②⑤ 憶遇友②⑩ 人事部 閑居⑩⑯ 閑意④⑪ 閑通④⑱ 別離部 暁行⑩⑱ 人事部 経過⑩⑱ 人事部 遇友②⑦ 天象部 夜④⑪ 草書④⑪ 圖画④⑪ 人事部 不遇友②⑩ 人事部 招客⑩⑱	人によふ① 道のたより② ふみたかへ③ ひとつて④ わする⑤ 忘れす⑥ おこはる⑦ 心とろかす⑧ 思ひつ⑨ 思ひつをこふ⑩ むかしあへる人⑪ あつらふ⑫ ちき⑬ 人をたつぬ⑭ めぐらし⑮ 思ひわつらふ⑯ くれどあはず⑰ 人をとむ⑱ とまらず⑲ なにをしむ⑳ おします㉑ わきま㉒ わかせ㉓ かくれつ㉔ 今なき思ひ㉕ 今はかひなし㉖ かたみ㉗	人事部 招客⑩⑱ 人事部 書信②⑦ 人事部 書信②⑦ 人事部 懷旧②⑩ 人事部 王昭君②⑩ 人事部 訪問②⑩ 人事部 不遇友②⑩ 留友②⑩ 留友②⑩ 留宿②⑩ 感歎②⑩ 閑官②⑩ 美女②⑩ 人事部 閨怨②⑩	

千載佳句の完全なる踏襲ではないが、恋の推移過程を追って行く中で、千載佳句の人事部を翻案したものである。歌語としては多数見受けられるものであって、歌題としての妥当性を欠いたものではあり得ないのである。その中には「あひ思ふ⑦」以下「いはで思ふ⑪」までや、「よるひとりりをり⑭」から「ふせり⑰」、「一夜へだてたる⑱」以下「遠道へだてたる⑳」、「めづらし㉔」から「口かたむ㉕」まで、更に「人づま㉖」から「思ひわづらふ㉗」までのように状態を羅列したり対句的にもってきたり、かなり類推的な配列を行っている。又古今集に於ける恋の部の配列意識について指摘されているのと同じように、古今六帖に於てはその細部にわたる部立自体に恋の前期から中期、さらには「今はかひなし㉘、これよ㉙、かたみ㉚」と、その破滅までを並べているのである。

以上が「雑思」の部立であるが第四帖に出ている「恋」の部についても面白い事実にあつかるのである。「恋①、片恋②、夢③、面影④、転寝⑤、恨⑦」は歌語としての成熟度は大きい。が、恋の外これらの歌題自体が当時迄の歌合の中にも認められないことである。しかしこれらの歌題は歌合その他に於ける題目的感じがないでもない。つまり古今六帖の編者が「雑思」として第五帖にもってきた細目は千載佳句の人事部よりの類推であつて、「恋」として第四帖に出した細目は当時の歌合に於ける歌題的感じのものであるということである。前に引用した山本明清の言葉を認めるにしても、「恋」と「雑思」の内容には部立に於てそれだけの相違があるということは注意しなければ

ならないだろう。古今六帖に於ては、久曾神昇氏が恋と思に於いてその区別を論じておられることが明確にあてはまらないのはもつともなことだと思われる。「雑思」自体が勅撰集に於ける恋の部の内容と同様の性格をもっているのである。

更に又疑問に思われるのは「恋」と「雑思」が第四帖と第五帖に離れていて、その中に「祝、別」が挟み込まれていることである。「雑思」が「祝、別」の後に来ていることは古今集の雑の部が恋、哀傷の次に位置したこと、関係があるように思われる。類聚書としては雑の部が哀傷の次に来ることが一つの性格となっていたのではなからうか。その雑の部に相当するものとして「雑思」を「祝、別」の後に位置させたと解釈したいのである。

「服飾」部は千載佳句との類似は極めて少く、連続する「言の葉㉚、ふみ㉛、こと㉜、ふえ㉝」が「人事部、宴喜部」の「書信㉞、琴㉟、笛㊱」に相当するのみで、それより前の「玉くしげ①」以下合計二十八項目、更にはそれより後の「ゆみ㉛」以下十一項目は共に一群をなして合致しないのである。しかし古今六帖と和名抄、更には白氏六帖との比較は平井氏の論文の中に明にされているが、その内容は和名抄も白氏六帖もあまりに散らばりすぎていて何を基準に聚めたものか見当がつかないのではなからうか。和名抄に於ては「巻第五調度部上、巻第六調度部下」、更に「巻第四装束部」を含め、「巻第三布帛部」をも含めなければならぬことになってくる。白氏六帖に於てもそれは巻第二、四、九、十六、十八、十九、二十五、二十六に括つていたのである。古今六帖の編者が和名抄もしくは白氏六

帖にこれだけ括っている項目を一括したと考えられないこともないのであるが、あまりにも飛躍にすぎた感があるのである。というのは「雑思」までみてきたように、古今六帖は千載佳句の影響が頗る大きいと思われるからであるし、千載佳句的な佳句撰、詩句撰が多数存在していたことも考えられるからである。本朝書籍目録の詩家の条をみると、

本朝秀句 五卷 藤原明衡撰日本佳句 二帖

統本朝秀句三卷 法性寺大闢 本朝佳句 二帖

拾遺佳句 三卷 藤原周光 近代麗句 十卷

新撰秀句 三卷 長方卿撰 古今詩鈔 十卷

統新撰秀句三卷 前内大臣 基家公撰 当世麗句 二卷

統本朝佳句三卷

等があるが、これらの部類も或程度の進展を示していたと思われるし、千載佳句式のものであって或程度の影響関係をもっていたのではなからうかと思われる。

「色、錦綾」の部も「服飾」部同様の観点に立つものである。千載佳句との適合は認められない。

第六帖の「草」部は七十項目の中類似するものは「春の草①、夏の草②、秋の草③、冬の草④、したくさ⑤、にこぐさ⑥、さうの草⑦」「らに⑮、きく⑯」「しをに⑳、くたに㉑、さうひ㉒」「はちす㉓、かきつばた㉔、こも㉕、花がつみ㉖、あし㉗、ひし㉘、ぬなは㉙、ねぬなは㉚、あさ、㉛」が千載佳句「草木部」の「水草①、雑花③、蘭菊④、菊⑤、牡丹⑥、薔薇⑦、蓮⑧、芍薬⑨、水草⑩、木蓮⑪、水芙蓉⑫、辛夷⑬」に相当するにすぎず、「山ぶき⑧」以下「をぎ⑭」迄、「くさのかう⑰」

から「りうたん⑱」まで、「かるかや⑲」と「かや⑳」、「うき草㉑」以下最後迄はいづれも群をなして合致しない。

歌合に於ては前裁合が多くなり遊戯的なものに変化しつつ、又その数も増しつ、あつた時代背景より考えて、これ程多数の草を並べたことは意義深いこと、云わねばならない。歌合に於ける草に関する歌題を正暦年間迄を、萩谷朴氏の『平安朝歌合大成』の中から拾ってみると次の数を得るのである。

- 夏草 三回、山吹 三回、撫子 九回、萩 七回、女郎花 十一回、薄 七回、花薄 一回、篠 一回、萩 二回、蘭 二回、菊 五回、草のかう 三回、きちかう 一回、竜胆 三回、紫苑 三回、刈萱 五回、紫蘭 一回、浮草 一回、款冬 五回、さこく 一回、さるとり 一回、山橘 一回、山菅 二回、みくり 一回、卯の花 五回、菖蒲 二回。

このように歌合に於ける題目の全ては古今六帖の項目の中に含まれていて、その他多数の草名を羅列していることは注目すべきことである。

次に「虫」部であるが、これは千載佳句の中には類似する詩題は一つも見出せない。むしろ白氏六帖の中に多数見受けられるものであるが、今日佚している漢詩句集の中にこういう部が少なくとも存したことは考えられることであり、と同時に歌合の題目を検討してみると、(草部と同様にして)

- 虫 一回、蟬 一回、夏虫 二回、蟋蟀 三回、松虫 三回、鈴虫 二回、日ぐらし 一回、螢 五回、機織女 二回、虫の音 二回、叢の虫 一回、負態虫 一回、秋の虫 一回、等が見出せることよりして、「草」部でみたと同様に古今六帖の

性格を物語っているのである。又時代的産物としての古今六帖を考へ得るのである。「木」部は「草木部」に該当する。

古今六帖	木 ①	千載佳句	
	しをり ②	水 樹 ②	
	は な ③	花 樹 ④	
	あきの花 ④	翫 花 ⑤	
	紅 葉 ⑤		
	は、そ ⑥	惜 花 ⑦	
	まゆみ ⑦		
	かへて ⑧		
	松 ⑨	松 ⑩	
	か へ ⑩	松 柳 ⑪	
	た け ⑪	松竹 ⑫、竹 ⑬	
	たかんな ⑫	花 竹 ⑭	
	む め ⑬	梅 ⑮	
	こうばひ ⑭	梅 柳 ⑯	

柳 ⑮	さくら ⑯	柳 ⑮
	にはぐら ⑰	
	花さくら ⑱	桜 桃 ⑶
	山さくら ⑲	
	ひさくら ⑲	
	ふ ち ⑲	藤 ⑳
	たち花 ㉑	
	ざくら ㉑	山柘榴 ㉑
	も、 ㉒	
	すも、 ㉒	桃 柳 ⑶
	からも、 ㉒	
	くるみ ㉒	桜 桃 ⑶

こ、では「たち花②、あべたち花③、しる④」や「なし⑤、山なし⑥」、更に「すぎ⑦」以下二十四項目が該当しない。「草、虫」部同様歌合題目の中にこの古今六帖の項目が見出せるのは注目すべきである。

最後に「鳥」部は千載佳句との類似性は極めて少ない。冒頭から「かひ④」迄は合致しなくて、わずかに「つる⑤、かり⑥」が「禽獸部」の「鶴①、猿鷹②」と相当するのみである。又一うぐいす⑦」以下十三項目は類似するものが見当らない。白氏六帖との比較は巻第二十九であるが、白氏六帖との適合度ははるかに大きいと云わねばならないようである。しかし、千載佳句的漢詩句集を類推し、それに対立するものとしての古今六帖を考へるべきであろう。

最後に「山、田、野、家、人、雑思、恋、服飾、色、錦綾、水、草、虫、木、鳥」の各部に於て千載佳句との適合がなかつたところは全て一群をなして、各部の後半に集つていたことは前述した通りである。当時の漢詩集のもつた部立がそうであつたのかもしれないが、現在見得る限りではそれは千載佳句との比較によつて類推する以上はできないことである。完全に千載佳句によつたものであるとすると、半まではその類似が大きく、後半はその類似が見られないということ、最初この漢詩集を座右にして仕事を進めて行つたものと解することができる。尚編者はその上に和歌的な言葉をかぎし漢詩集にない部を設定することによつて手本以上のものを作成しようとしたのではなからうか。

つまり、この千載佳句の中の部立を踏襲し、適当に和語に翻

案しつ、更に又挿入を行いつつ、その後に漢詩集にないものを適宜羅列していったものと思われるのである。

二

古今六帖と千載佳句との関係についてその相関関係を強固なものとする根拠に項目数がある。千載佳句の細部の項目は合計二百五十八門ある。しかるに古今六帖のそれは題目録によると合計五百十六門あるのは何故であろうか。第一帖「天」の部にある「火」と第六帖「木」の部にある「かにはざくら」とはこの題目録の中に含まれていないのは何故だろうか。「火」と「かにはざくら」を加えると二つ増えて丁度二倍ということにはならなくなるのであるが、目録を作る時に（目録が後人の補入にしろ、そうでないにしろ）或はその数を二倍にする為に書き入れなかつたのだろうか。或は又、千載佳句の項目数は意識になくその目録を作つて行つたのであるが、本当に偶然にも二つを忘れてしまったのか。古今六帖と千載佳句の部立の類似から考えても前者の方が妥当のように思われる。とするとこの編者は完全に千載佳句そのものを意識していたことになるのである。つまり古今六帖の編者の意識の中には千載佳句という当時の作詩参考書は、作歌参考書に対するものとして入つていたということができるのではなからうか。

第一帖の「春、夏、秋、冬」の部はその季節の初から暮までを順次並べて行きその間に行事を挿入したという点に於ては千載佳句も同様である。「天」部でも同様で月から風、風から雨、その後に雪という配列順序はその過程に於て類似性をもつてい

るといえる。

第二帖では「田、野」の部で見たように、「春の田①、夏の田②、秋の田③、冬の田④」と「春の野①、夏の野②、秋の野③、冬の野④」に対して、「春遊③、夏遊④、秋遊⑤、冬遊⑥」が順序正しく配列されている。「家」部でも「家①、隣②」と隣接する歌題は千載佳句の「居宅①、隣家②」と隣接する詩題と非常に類似している。「仏事」部でも「寺①、鐘②、法師③、あま④」という順序はそのままの順に千載佳句の中に見出せるものである。

第三帖の「別」部に於ても「別①、ぬき②、手向③、旅④、かなしび⑤」に対応する詩題の順序は入り乱れることなく順序を保っているのである。

第六帖の「鳥」部に於て唯一つ類似しているところの「つる⑤、かり⑥」は千載佳句「禽獸部」の「鶴①、猿鷹②」という順序に一致するのである。

第五帖「雑思」に於て千載佳句の「人事部」との順序が一致せず、入り乱れているのは古今集以来恋の部の配列が、恋の前期から中期更にはその末期へと段階的配列をしていることと考へ合せるならば、当然のものと思われる。

これを古今六帖と白氏六帖の順序を追ってみると、その開きの大きなことに気付くのである。例えば、四時に相当する第一巻は

第一巻 天地日月星辰雲雨風雷四時節臘

となつていて、簡単に古今六帖の配列を類推できるものではないものと思われる。しかも白氏六帖の細目は一七〇〇門以上存

するし、卷五、卷八、卷十三、卷十五、卷二十一、卷二十二、卷二十七、等の関係ない巻も存するのである。

千載佳句自体が漢籍の影響を受けていることは川口久雄氏が論じておられることであるが、今迄の論を総括して「漢籍——千載佳句——古今六帖」という影響関係のルートを提起することができのではなからうか。

結語

以上みてきた古今六帖と千載佳句との類似を総括してみると左のパーセンテージを得る。

古今六帖細項目数〓五百十六（「火」「かにはさくら」を除く）
千載佳句との適合数〓二百二十二

各部によってその適合度はかなり違っているが全体で四十三パーセントの類似がある。このことは逆に千載佳句の立場からいえば八十パーセント以上の類似ということになる。白氏六帖には少しも見当らない「雑思」の部が千載佳句の人事部との比較によって明らかになり、「恋」部との対称を考えてみると、そこには「恋」と「雑思」とのはっきりした違いが生じていることが明らかになったし、古今六帖の各部に於て前半は千載佳句との類似性が強いが、後半はそれが弱いことが明らかになった。更に又千載佳句の詩題が二百五十八であり古今六帖の歌題が五百十六あることより、古今六帖の編者の意識の中に千載佳句そのものが強く入っていたと思われるのである。

本論でみてきたようにその細目は漢語を和語に翻案したのもあり、その間にあつて連想により各部に適宜挿入したのも

ある。更に何かの要求により後半に添加されたものもある。その何かは恐らく歌合という題詠歌のもつ性格であつたらうし、千載佳句の詩題が二百五十八ということもあつたであらう。

最後に古今六帖の題目録の冒頭についてみてみると

古今和歌六帖題目録

第一帖

歳時部（施点筆者）

春

春立日 む月 ついたちの日……：

とある。しかして第二、三、四、五、六帖にはこの「歳時部」に相当する記載が存在しないことは何を意味するのであろうか。

ここで臆測が許されるならば、古今六帖も「歳時部」的な大部を設けて或は十五部に統合され、完全に千載佳句の部立数を踏襲していたのかもしれない。

千載佳句との比較を試みることにより、今迄白氏六帖の影響甚大であると云われてきたのに対して、より以上に漢詩と和歌の変遷期にあつた産物としての古今六帖を認識し、その役割を考えてみたしだいである。あるいは古今六帖のもつ一つの性格として一言のもとに葬り去られてしまうかもしれない、が、撰者を考える時、もしくは成立年代を考える時何らかの方法で役に立てば幸である。

注

一 「白氏六帖を媒介としての古今六帖私考」国語と国文学 昭和三十

年七月

二 諸説あって一定していない。

三 川口久雄氏『平安朝日本漢文学史の研究』による。

四 『平安時代文学と白氏六帖』第四章第六節「千載佳句成立の年代」

五 『平安時代日本漢文学史の研究』第十六章第二節「大江維時と日観集、千載佳句」

六 内閣文庫乙本・松平文庫本は「三月イ三日」とあり、上野図書館本は「三月三日」とある。内閣文庫甲本は「三日」とあるのみである。

七 内閣文庫乙本は「八月イ十五夜」、上野図書館本は「八月十五夜」内閣文庫甲本と松平文庫本は「十五夜」となっている。

八 古今六帖細部下の数字は各部に於ける順序を示す。千載佳句細部下の数字も同様である。

九 平井卓郎氏（注一）に同じ。

一〇 山路平四郎氏「古今和歌集の部立について」 文学 昭和二十二年三月

小沢正夫氏「勅撰集の部立の研究」 国語と国文学 昭和十六年四月

福田良輔先生「古今集和歌の一排列基準としての美意識」台湾 昭和十五年六月

一一 古今六帖の編纂時代が諸説ある中で最も時代の新しい山田孝雄氏の説を極限と考えて仕事を進めたものである。「古今六帖覚書」日本大学国文学誌 語文 才一輯

一二 寛文九年板本による。山本明清の標註本と石塚龍磨の校証古今和歌六帖によると、契沖本によって「火」かにはさくら」は補ってある。

一三 『平安朝日本漢文学史の研究』 才十六章才二節「大江維時と日観集千載佳句」

▼受贈図書 昭和40年6月〜12月

正岡子規

地球儀・天球儀 二

徳川家康公伝

近世文芸資料と考証 IV

近代文学選

国立国語研究所年報（三十八年度）

共通語化の過程

類義語の研究

近代文学と仙台 一

奈良時代東国方言の研究

日本文学の自然観照

保険百歌

天地のはじめ 二

和漢古書分類法

連愚腰折集

創立三十年記念論文集（文理篇）

逐次刊行物目録（37年度）

〔抜刷〕

「おあんはなし」とその言語

おあんはなし

天理図書館

天理図書館

日光東照宮社務所

七人社

学友社

国立国語研究所

国立国語研究所

国立国語研究所

日曜随草社

福田良輔

瀬古 確

伊吹 高吉

前園 直健

長沢規矩也

宮本 八郎

福岡大学

国立国会図書館

吉野 忠

吉野 忠

吉野 忠